

エドワード二世

——運命の車輪に手をかけた四人——

谷 崎 寿 人

「エドワード二世」(Edward II)は史実によれば、エドワード一世(Edward I)の四子として1284年に生れ、王位について後、寵臣を用い、ために失政多く諸侯の反抗にあい、王妃イザベラ(Queen Isabella)および王に反抗する貴族たちの指導者ロージャー・モーティマー(Roger Mortimer または Mortimer the younger)によって捕えられ、廃位を迫られ、幽閉の地で殺される、とある。マーロウ(Marlowe)、が同名の戯曲(正確には The troublesome raigne and lamentable death of Edward the second, King of England: with the tragicall fall of proud Mortimer)をつくるにあたっては、シェイクスピア(Shakespeare) その他当時の劇作家が利用したホリンシェッド(Holinshed)の「年代記」とストウ(Stow)の「年代記」によったと推定される²¹⁾。そしてこれらの資料を駆使してイギリス史劇に大きな影響を与える作品を彼はつくりあげたわけである。この作品に関しては、たとえば D. M. Bevington²²⁾ は「『エドワード二世』は、マーロウの作品のうちもっとも入念に構成された劇、……として一般に迎えられる。」といている。

この制作年代1591年から1592年にかけてと推定され、出版業者組合簿に1593年7月6日登録され、1594年に刊行された「エドワード二世」²³⁾には、四人の主役²⁴⁾がいると考えられる。エドワード王、妃イザベラ、ギャヴェストン(Gaveston)、モーティマー—叔父(Mortimer, the elder)と甥ふたりのモーティマーが登場するが、以下モーティマーというのは「若い」つまり甥のモーティマーをさす—がそれである。これら四人がそれぞれ愛し、あるいは憎しみながら悲惨な最期をとげることになる。ギャヴェストンは、モーティマーを中心とする軍勢に王の軍が敗れ、海路をおちのびる際に捕われ殺害されることになる。エドワード王は貴族側をやぶり一度はモーティマーを塔内に幽閉するがやがて脱走される。その後王妃とモーティマーの軍勢はフランスから反撃し、今度は王が敗れモーティマーが王殺害の刺客として派遣したライトボーン(Lightborn)に虐殺される。モーティマーは最後に、エドワード二世の子エド

エドワード二世

ワード三世によって首をうたれることになり、王妃イザベラも息子エドワード三世の命で塔に幽閉されることになる。

死に直面してのエドワード二世の態度は、次のことばによってうかがうことができる。

Farewell, I know the next news that they bring
Will be my death; and welcome shall it be;
To wretched men, death is felicity. (ll 2112-14)*

または

I know not, but of this am I assured,
That death ends all, and I can die but once. (ll 2139-40)

いずれもモーティマーにとらわれてから、モーティマーの命をうけたライトボーンに殺害されるまでの間のことばであるが、「不幸な人間にとって死は幸福である。」「一度しか死ぬことはできないもの」というように恐怖におそわれている姿は全く見られない。

同じくモーティマーの場合も、エドワード三世によって首を打たれる最後の場面で、
Farewell, fair queen, weep not for Mortimer,
That scorns the world, and, as a traveller,
Goes to discover countries yet unknown. (ll 2632-34)

「未知の国ぐにの発見におもむく」と敢然死にのぞむものである。両者いずれも運命に忠実で、めぐりあわせとあきらめているのである。

ここで上記の四名を取りあげ、エドワード二世と残りのそれぞれ三名との関係をみてゆくことにする。そうすればこの劇がどのような構成をもっているのか。マーロウの他作品と比較してすぐれているといえるか明らかになろうかと思うからである。フォースタス博士 (Dr. Faustus) の無限の知識欲、バラバス (Barabas) の無限の富の追求等、このような人物は出てこないであろうがモーティマーのような権謀術数にたけた主役もいることであるから。

* 引用文は C. F. Tucker Brooke 編の *The Works of Christopes Marlowe* による。ただし語の綴りは Havelock Ellis 編: *Christopher Marlowe (Five Plays)* によった。

1

この劇の冒頭登場するのはギャヴェストンであり、ト書には「王からの手紙を読みながら (reading on a letter that was brought him from the king) とある。つま

り追放の身から再び宮廷にもどることが可能になったことをよろこぶ。

Ah ! words that make me surfeit with delight !

What greater bliss can hap to Gaveston

Than live and be the favorite of a king ? (ll 3-5)

ついで、宮廷にもどった時いかなることをして王を楽しませるかをいろいろと述べる。

I must have wanton Poets, pleasant wits,

Musicians, that with touching of a string

May draw the pliant king which way I please :

Music and poetry is his delight ; (ll 51-54...)

ギャヴェストンは心から王を楽しませようと考えている。まさに寵臣の典型といえよう。また王は、モーティマーに「なにゆえ世間の者がこれ程きらっている彼(＝ギャヴェストン)を寵愛されるのか」ときかれて、次のように答えるほどである。

Because he loves me more than all the world (l 372)
もとよりギャヴェストンの態度も「王以外の誰に対してもひざまずくことのない (l 19)」というものであるから、モーティマーをはじめとする貴族たちの反感を買い再追放を計画されることになるのは当然であろう。叔父のモーティマーがスコットランドへおもむく前に、甥モーティマーに、王とギャヴェストンの関係について述べる次の個所がある。

And, seeing his mind so doats on Gaveston,

Let him without controulment have his will.

The mightiest kings have had their minions :

Great Alexander loved Hephestion ;

The conquering Hercules for Hylas wept ;

And for Patroclus stern Achilles drooped

And not kings only, but the wisest men :

The Roman Tully loved Octavius ;

Great Socrates wild Alcibiades. (ll 686-94)

巷間、同性愛の関係にあったと伝えられる数組の例をあげて、王とギャヴェストンとの関係もまた同様であることを示している。

マロウの筆によれば、ギャヴェストンの王をよろこばせ王に愛される性情は生得のものであるとえがかれている。そのため彼ギャヴェストンは、たくまずして高位 (Lord High Chamberlain など) が授けられ、王自身の姪と婚約が発表されること

になる。ギャヴェストンその人も pleasant wit (l 51 参照) であるといえようとし、したがって貴族との戦闘においては、何の力添えも王に対してなしえなかったであろう。しかし王をして

I'll budy with the barons and the earls,
and either die or live with Gaveston (ll 137-8)

といわせるほどである。王はギャヴェストン、ギャヴェストンの死後はスペンサー (Spencer) というように特別の家臣を重用するため、そして同性愛にふけるため、国政をおろそかにするという欠点を露呈し身の破滅にいたる。王は元来柔弱ではなかった。幽閉され死にのぞんだ王は

Tell Isabel, the queen, I looked not thus,
When for her sake I ran at tilt in France,
And there unhorsed the Duke of Cleremont. (ll 2516-8)

というが、これによって察することができよう。その王が、ギャヴェストンを寵愛のあまり貴族たちの反乱にあい遂に虐殺されるということはまさに悲劇である。この悲劇を醸成したギャヴェストンを、この劇前半の主役といってもさしつかえなかりう。Henderson その他も、ホリンシェッド「年代記」にあらわれるギャヴェストンよりは、はるかに重要な役割をなしている。— (マーロウがはるかに重要な役割を負わせている) —といっているが、史劇を手がけたマーロウが劇の構成に意を用いたために、ことさらにギャヴェストンをこのように扱ったものと思われる。ギャヴェストンの最期は、エドワード二世同様悲惨なものであった。モーティマーと王とのはじめの戦いで、王の軍勢が敗れ、王とは別路を逃げたギャヴェストンは途中で捕われ殺害されたのである。

2

劇全体を通じて大きな役割を占めているのは、やはりモーティマーであるといえる。モーティマーは最初からギャヴェストンに、またギャヴェストンを溺愛するエドワード二世に反感を抱く人物として登場してくる。老モーティマーは王に対して公然と

If you love us, my lord, hate Gaveston (l 80)
進言するし、甥モーティマーも
Come, uncle, let us leave the brain-sick king,
And henceforth parley with our naked swords. (ll 125-6)

という。このふたりおよびその他の貴族たちウォリック (Warwick)、ランカスター (Lancaster) などは会合をおこないギャヴェストン再追放を計画する。この発端は、ギャヴェストン追放を願いでたコヴェントリの司教 (Bishop of Coventry) が、王により投獄され家も財産もとられられる (ll 200-203) という事態である。この後、王は妃を利用して、モーティマーと話しあわせ、一応王と貴族の間は小康状態をたもつが、使者があらわれて、スコットランド討伐にいていた老モーティマーが捕虜となり身代金五千ポンドを要求されていることを知らせる。この五千ポンド支払いを王に請求していられず、甥モーティマーは叛乱の意志を示す。一方王はギャヴェストンと王の姪との結婚の準備をすすめている。王の弟ケント伯 (Earl of Kent) もギャヴェストン追放を進言するがいられず貴族たちに味方することになる。そしてモーティマーは兵をおこし、王の軍は敗退し王は陸路、ギャヴェストンは海路を落ちてゆく。この後ギャヴェストンは貴族のひとり、ウォリックに捕えられ、王のもとにはギャヴェストン殺害の模様が報告される。王はこれに激怒し、あらたにスペンサーを寵臣として用いることになる。この場合も貴族たちによってスペンサーの重用をさけるようにいわれるが、かえって反撥し、再び王軍と貴族軍が戦端を開くことになり、今度は貴族たちが敗れ、その結果モーティマーは塔内に幽閉されることになる。

他の貴族たちは断罪されるのに、モーティマーは幽閉されるにすぎないのはマローウの作為であろう。劇においてモーティマーが首謀者であっても、事実においては別人が首謀者であったということである。たとえば、Sanders は「モーティマーは資料によるところが少く、マローウの創造によるところが多い」という意味のことをいっている⁵⁾。マローウの創出したモーティマーは塔から脱出し、やはり王に追われた王弟ケント伯と共にフランスに渡る。これより先フランスにあって、王子（後のエドワード三世）とフランスの助けを得られず困惑し、遂にはサー・ジョン・オブ・ヘイノールト (Sir John of Hainault) の庇護を受けることになった妃イザベラのもとに、モーティマーとケント伯はおもむく。王は前回のたたかいに勝っておごっているところへ、モーティマーが塔からフランスへ逃亡して、妃イザベラと王子に合流し、イギリスに進撃してくることを知らされる。王はこれを迎えうつ準備をしたが、モーティマーとイザベラの軍が攻めよせてきて、今回は王の軍が敗走し、アイルランドへ向かったが風にはばまれニース修道院に難をさける。しかしモーティマーの部下に発見され、捕えられ、ケニルワース (Kenilworth) の城に幽閉され、刺客ライトボーンに暗殺されることになる。

モーティマーもまたマキアヴェリ的人物である。

The prince I rule, the queen do I command,
And with a lovely conge to the ground,
The proudest lords salute me as I pass;
I seal, I cancel, I do what I will.
Feared am I more than loved; let me be feared;
And when I frown, make all the court look pale. (ll 2379-84)

あるいは
As thou intend'st to rise by Mortimer,
Who now makes Fortune's wheel turn as he please,
Seek all the means thou canst to make him droop,
And neither give him kind word nor good look. (ll 2196-99)

にみられるように、王を捕えてからは、「王子を支配し、女王に命令をし……何事も
思いのままにする……」「運命の車輪を思いのまま回転させる」身分となった。よろ
こびの絶頂にあってのせりふである。一面非常に慎重に事をはこぶ面もみられるし、
また反面非常に単純なところもあるように描かれている。「愛されるよりは恐れられ
る方がよいという心情は、やはり絶対の権力を持ったものでなければ口にのぼせるこ
とは不可能であり、事実一時期モーティマーにはこのような絶大な力がそなわってい
た。しかしこれは王弟ケントや新王エドワード三世の反感を買うことになる。そして
エドワード三世によって打ち首にされる時、今度は「運命の車」には、触ればま
っさかさまに落ちてゆくところのあるのを悟る。バラバスの最期に似た場面である。

Base Fortune, now I see, that in thy wheel
There is a point, to which when men aspire,
They tumble headlong down; that point I touched,
And, seeing there was no place to mount up higher,
Why should I grieve at my declining fall? (ll 2627-31)

といい、全くさとりきって従容として死に就くのである。資料から雑れて、このよう
な人物モーティマーをつくりだしたのは、作家としてのマーロウの円熟の証左であろ
う。

3

マーロウは女性の描きかたが拙劣であるというのが定説となっているが、エドワー
ド二世の妃イザベラは、最初王の愛がギャヴェストンに移ってしまったので、その悲

しみを述べ同情をあつめるような女性である。たとえば

O miserable and distressed queen !

Would, when I left sweet France and was embarked,

That charming Circe walking on the waves,

Had changed my shape, or at the marriage-day

The cup of Hymen had been full of poison, …… (ll 466-70)

と自らの不運、悔恨を述べている。しかしその後はただ嘆いているのではなく変貌してゆくことになる。結局王の妃への愛は回復することなく劇は進行してゆき、モーティマーによる第一回のエドワード攻撃のときも、王は妃を残したまま落ちのびてゆく。またその後は妃の兄のフランス王がノルマンディを占領した報告をきくと、王は妃にフランス王との折衝を依頼することになる。

K. Edw. ……

We will employ you and your little son ;

You shall go parley wilt the king of France.—

Boy, see you bear you bravely to the king,

And do your message with a majesty. (ll 1378-81)

その後、妃はフランスにおいて、イギリスから逃亡してきたモーティマーと力をあわせ、イギリスに軍勢をひきいて進撃することになる。そして前に引用したように、妃はモーティマーに命令されるような立場 (l 2379) になっているのであり、sweet Mortimer とよぶ関係になっている。

この劇の観客のイザベラに対する態度は最初は憐憫、同情であろう。なぜならば彼女は善意ではあるが意志薄弱の様相を呈していたからである。しかしモーティマーとの関係が次第に明らかになる。すなわち墮落がはじまり、進行し、遂にはわが子エドワード三世にもみはなされるようになると、観客の憎悪のまとなるであろう。この変容は彼女がモーティマーの傀儡と化したという説もあるが、イザベラ自身がやはりマキアヴェリの素質があり、王の愛を失ったことが原因で積極的になっていったと考えられないこともない。いずれにせよマローウはこれまでにない女性登場人物をつくりだしたことを得意としたのではあるまいか。

以上エドワードを軸として、その他三名（ギャヴェストン、モーティマー、イザベラ）との関係を大略みてきたわけである。いうまでもなく、登場人物はこの他多数あ

エドワード二世

るわけで、その場面、場面において不可欠の構成要素をなしている。しかし、この四名ほど強烈な性格をもっている人物は見あたらない。しいて注目に値するのは、王弟ケント伯であって、彼は時に応じて、あるいは王の側に立ち、またモーティマーを首領とする貴族たちの側にも立つ、おそらく一般の観客がそうあって欲しいと願うような立場に終始なっていたものと考えられる。

「この四名ほどの強烈な性格のもち主」といったが、その強烈さは、やはり、タムバレイン大王 (Tamburlain the Great)、バラバス、フォースタス博士のそれとは異なる感じを与えるものである。つまり「エドワード二世」の登場人物たちは、この三者に比較すると常人に近いというか、さほど強烈ではないということになる。ホリンシェッドに資料をあおいだことから、歴史にある人物たちの個性をあまり大胆に改悪することがはばかれたのか、あるいは意図して彼にとってあらたな型の劇をつくりあげることにとりくんだのであろう。

注

- 1) P. Henderson : Christophes Marlowe p. 117.
- 2) D. Bevington : From Mankind to Marlowe p. 234
- 3) P. Hendesson : Christojher Morlowe p. 116.
- 4) C. Leech : Edward II Power and Suffering (Critics on Marlowe) p. 77.
- 5) W. Sanders : The Dramatists and the Reclived Idea p. 123

(たにざき ひさと 本学講師 英語)